

# 地域学への招待

柳原邦光

Door to Regional Sciences

YANAGIHARA Kunimitsu\*

キーワード：地域学，グローバル化，個人化，社会的排除，社会的包摂，わたし，ローカル，生の充実  
Key Words: Regional Sciences , globalization, individualization, social exclusion, social inclusion, self, local, a satisfying life

本稿は、2017年4月12日に鳥取大学地域学部1年生の必修科目である「地域学入門」の初回に「なぜ、今、地域なのか」と題して行った講義の原稿である。大学に入学したばかりの学生たちに向けた講義であるため、地域学の基本的な考え方をできるだけ平易な表現で伝えるよう心がけた。また、地域学部を4学科制から「地域創造コース」、「人間形成コース」、「国際地域文化コース」の1学科3コース制に改組したことも考慮した。とくに「国際地域文化コース」は従来の「地域文化学科」に「国際」を加え、大きく変わった。その点を意識して、地域文化学科では言及することのなかった内容を新たに盛り込んだが、まだ十分とはいえない。「地域学」はこの領域をさらに充実させていかなければならない。今後の積み重ねを考えて、講義原稿ではあるが、公表することにした。

## I. はじめに

今日は「地域学入門」の第1回目ですので、地域学のもっとも基本的なことを話します。そうはいっても、これまで受験勉強を一生懸命されてきたわけですから、「地域」という発想になかなかなじめないでしょうから、とりあえず、次の2点を意識しながら聴いてください。みなさんは、今、頭脳がもっとも柔軟で、吸収力があって、長い人生を生きていくための基盤をつくる時です。その貴重な4年間を地域学部にとしたわけですから、「地域学部と地域学に4年間を託すだけの価値があるのか」という強い問いをもって、授業に臨んでください。これが1つ目です。それからもう1つ。3年後に就職活動が始まります。そのとき、面接で質問されるはずで、「地域学部ってどういう学部ですか。何を学んだのですか」と。そこでうまく説明できたら結構ですが、できないと次に進めないかもしれません。そのためにも「地域学」を自分の言葉で説明できるよう、頑張ってください。

しかしながら、地域学をまとまった形で学ぶ機会は、この授業のほかには3年次の「地域学総説」しかありません。ですから、授業で「吸収できるものはすべて吸収する」という姿勢が必要です。授業の他には、『地域学入門—〈つながり〉をとりもどす』（ミネルヴァ書房、2011年）という本があります。地域学部の教員が共同で執筆したものです。やさしく表現したつもりですが、すぐには理解できないかもしれません。ゆっくりでいいですから、しっかり読んでください。

それでは、これから、「なぜ、今、地域なのか」と「地域学は何を目指しているのか」について、お話しします。

---

\*鳥取大学地域学部地域学科

## II. なぜ、今、地域なのか

「なぜ、今、地域なのか」というテーマは、考えようによっては、わざわざ論じるまでもないかもしれませんが。急激な人口減少、高齢化、過疎化などで、消滅したり、立ち行かなくなる集落や市町村が出てくることは、十分予想されているからです<sup>1</sup>。地域でなんとかしようと、すでに多くの自治体やNPO法人、住民などが取り組みを進めています。

厳しい状況を知っていただくために、例を1つ紹介しましょう。わたしは島根県大田市の山奥で生まれ育ちました。そこでの一番小さなまとまりは「集落」です。高校生の頃、集落には家が15戸ありました。今は7戸です。40年あまりで半分以下に減りました。児童生徒は1人もいません。集落で一番若い人でももうすぐ還暦、60歳になります。10年もすれば、戸数は3~4戸になるはずですが。残念ですが、もうどうにもなりません。願うといえば、集落の人たちがいかにして人生の最後を穏やかに過ごすことができるかですが、これさえ難しいのです。集落は、遠くない将来、「完全に自然に戻る」ことになるでしょう。

これはわたしの集落だけの問題ではなく、各地で厳しい状況に直面しているはずで。何とかしようと思えば、地域住民が知恵を絞るしかありません。ですから、今、必要なのは、「地域の抱える問題をどうすれば解決できるのか」を考え、知恵を出して、行動することです。地域学の場合は、「地域問題を解決するための学として実効性をもつことができるのか」が問われています。

実際には、2つとも大変難しい課題です。地域学部はこの問題に取り組まなければなりません。しかし、わたしはこうも思います。「地域」が目される背景には、「地域課題の解決」という表現では説明できない、何かがあるのではないかと。

もちろん、地域課題といっても様々です。決して少子高齢化、過疎化だけではありません。「地方」や「田舎」だけの問題でもなく、都市にも地域課題は多々あります。わたしは、地域課題の解決をはかるという場合も、「なぜ、今、地域なのか」という問いにしっかりと向き合うべきだと思うのです。それほどこの問いには深い意味がある、と考えています。今日の講義では、この点をお伝えしたいのです。それでは、ここからが本題です。

### 1. 「地域」という言葉

最初に「地域」という言葉に注目してみます。問題は、「地域」が何を指しているのか、その背後に何があるのか、です。わたしたちは「地域」という言葉を日常的に使いますが、「地域って何ですか？」と問われると、たいていの人が言葉に窮してしまうと思います。どういうわけか、うまく説明できないのです。

そこでとりあえず、「地域」がどのように用いられているか、見てみましょう。例えば、「地域で子どもを守る」とか「地域を巻き込んで」といいます。こういうときの「地域」はかなり狭い範囲で、生活の場とそこにいる人たちのことを指していますが、ときに生活範囲よりも広い空間の場合もあります。実際には、ご近所や「集落」、「学区」かもしれませんし、市町村や都道府県かもしれません。山陰や山陽、さらには東アジアやヨーロッパのようにとてつもなく広い範囲かもしれません。また、地図で確認できるような、明確に線引きされた行政単位ではなくて、漠然とした広がりを目指すこともあります。やっかいなことに、「地区」や「地方」など、「地域」とよく似た言葉もあります。

「地域」は、曖昧で不確かであるにもかかわらず、何となく通じる、不思議な言葉です。この曖昧さ

<sup>1</sup> 増田寛也編, 2014, 『地方消滅』中央公論社, 小田切徳美, 2014, 『農山村は消滅しない』岩波書店参照。

はどこから来ているのでしょうか。どうして、いつから、このような言葉を使うようになったのでしょうか。

わたしの経験でいえば、大学生の頃、日常生活で使うことはなかったように思います。文献の中には1980年代以降というものがあります<sup>2</sup>が、ここでは、時期よりも、「一般的な使用という事実は何を意味しているのか」に着目してみます。わたしは次のように考えています。「地域」が普通に広く用いられるようになったのは、「社会がこれまでにない何かを求めていることの現われではないか、時代の何かを映し出しているのではないか」ということです。

そうだとすれば、「なぜ、今、地域なのか」という問いは、何か大きな問題に関わっているように思います。今日は、このような観点から考えてみます。

## 2. 生活から考える

まずは身近なところから考えてみましょう。あるとき、学生と話をしていた気づいたことがあります。学生が卒業研究で自分の住んでいる集落を調べることになり、年配の人たちにインタビューしました。話を聞いて次のように思ったそうです。「昔の人たちはみんな助け合って暮らしていた。そうしないと生きていけなかったからだ。だから、時にはいいたいことがあっても何もいわず、じっと耐えるしかなかった。それに比べると、わたしたちは幸せだ。人に頼らずに生きていくことができる。自由で、自立している」と。

この話には考えさせられました。学生のいいたいことはよくわかります。集落で暮らしていると、当然、気を遣わなければならないこともあります。集落に対する感情は微妙で複雑なのです。それに、確かに今は他人の世話にならなくても、生きていけるような気がします。お金さえ払えばなんでも手に入りますから、他人の力を借りなくてもすみます。また、自分でつくらなくてもいいのですから、その分、自分の時間ができて、したいことができます。これは本当にありがたいことです。しかし、「自立して自由に生きている」といえるのでしょうか。

考えてみますと、わたしたちの生活は、誰かが食糧や製品などを生産し、流通させているからこそできる生活です。電気、ガス、水道、交通、通信、みんなそうです。海外を含めて、見も知らない無数の人たちが日々働いているからこそ、今の快適な生活があるのです。もちろん、誰もがそうした役割を分担して果たしています。みなさんも入学したばかりですが、4年後は就職するはずです。就職するとは、互いに支え合って生活する中で自分がどのような役割を果たしていくのか、決めることです。そうした役割を果たしながら、自分自身と無数の人々の生活を支えるのです。

「他人の世話にならず、自立している」かに見える生活も、実際には支え合いという複雑な関係性によって成り立っているのです。自分の力だけで生きているではありません。

「自立」の問題を別の角度から考えてみましょう。東日本大震災は大変な衝撃と痛みとともに重要な「気づき」をもたらしました。わたしは、震災当時、テレビを見ていて、なんとなく違和感がありました。たとえば、地震で道路が壊れて行き来できなくなった集落の人たちがヘリコプターで救出されるシーンです。「孤立した集落」という表現を使って、大変な事態だと記者は叫んでいました。わたしはこの言葉に反発を覚えました。

子どもの頃を思い出してみますと、我が家は貧乏でしたが、農家でしたので、とりあえず米と野菜

<sup>2</sup> 赤坂憲雄さんによれば、「地域」は1980年代半ば以降、「地方」に取って代わるようになった。そして、「地域学」の登場は市町村合併と関係があるという。赤坂憲雄, 2010, 『婆のいざない 地域学へ』 柏書房, 213。

はありました。漬物はもちろんのこと、ずいぶん以前は、豆腐や味噌、醤油さえ家でつくっていました。いつの時代からかわかりませんが、水は山から引いていましたので、水道料金を払ったことはありません。家の周りや山にある雑木を自分たちで伐って薪にして、それでご飯を炊いたり風呂を沸かしたりしていました。冬は大雪のためによく停電しましたが、家が暗くなった程度で、さほど困りませんでした。必要なものの多くを自前で調達していたからです<sup>3</sup>。そんな生活経験があったために、「孤立」して「救出」されることに強い違和感を覚えたのです。

ところが、冷静になって今の生活を考えてみれば、思いとは裏腹に、多くの人たちと同じように、わたしもたちまち困った事態に陥ってしまうでしょう。水や食べ物をどうするのか、煮炊きは？暖房は？などなど、生活の何もかもが自分ではどうにもならないことばかりです。そもそも、祖母母や両親と違って、わたしには在るものを活かしたり、何かをつくったりする技術がありません。「生きる力」云々をいう前に「生きるための技」をもっていないのです。わたしにできることといえば、せいぜい鋏を使うことくらいです。

わたしたちの場合、生きていくために必要なものを自分で用意することはありません。ほとんどのものをお金と引き換えに手に入れています。生活を支えているのは、電気や水道など様々な巨大システムです。システムはとても便利でありがたいものですが、絶対的な条件を1つ満たさなければなりません。料金の支払いです。それさえできれば、システムを利用して、他人の世話にならずに、人とあまり関わらなくても、暮らすことができます。逆に、お金がなければ、生活できません。人付き合いも困難になります。ですから、どうしても「お金、お金」になってしまいます。「自由で自立した」かに見えるわたしたちの生活も、よくよく見れば、一生懸命に働いて巨大システムを支えながら、そのシステムを利用するためにお金を稼ぐ毎日です。

巨大システムは失われたり、稼働しないこともあります。それを教えてくれたのが大規模な自然災害です。人間は大自然の猛威の前にはなすすべがありません。システムが崩壊したり、システムから遮断されると、自分ではどうにもできないのです。生きていくことさえ困難になります。また、ほとんどすべてのものを外から手に入れていますので、外から情報が得られないと、ひどく不安になります。システムがなければ、わたしたちは無力で、何もできないのです。

とはいえ、情けないことばかりではありません。システムを失ったとき見えてきたのは、「地域」に暮らす人たちの、助け合おう、支え合おうとする姿でした。生活を支えているのは、巨大システムだけではないのです<sup>4</sup>。

### 3. 近現代世界の抱える諸問題

次に「わたしたちの生活を支えているのは何か」という問題を、「国民国家」、「グローバリゼーション」、「個人化」の観点から考えてみます。

最初に、国民国家です。「地域」とよく似た言葉に「地方」があります。「地方」は、「中央と地方」といわれるように、権力や文化の中心である「中央」に対置される言葉で、権力や優劣の関係を前提としています。「中央」に「地方」が従属するという関係です。国家権力や経済力が集中した「中心」と、それに従う「周辺」という捉え方です。

<sup>3</sup> 船曳由美, 2010, 『100年前の女の子』講談社は, 明治42年に栃木県のある村で生まれ育った女の子の暮らしを丁寧を描いている。筆者にはどこか懐かしい世界である。

<sup>4</sup> 内山節, 2011, 「緊急メッセージ:一緒に《里》を再建しよう」, <http://www.uthp.net/20110428.pdf>. 内山節, 2011, 『文明の災禍』新潮社参照。

「地域学」で考える「地域」は違います。「中央」とか「中心」という優劣関係の発想ではありません。「地方」ではなく「地域」というとき、それぞれの地域が持っている個性、それが人々の暮らしに対してもつ意味を等しく認め、尊重するという立場に立っています。

「中央と地方」の問題から始めたのは、優劣関係のような意識がわたしたちのなかにあるからですが、それは根拠のないことではなくて、国家の大きな役割と関係しています。実際、国家は「制度」を通して生活のあり方を、かなりの程度、決定しているのです。ということで、次に生活と国家との関係を考えてみましょう。

先ほどわたしたちの生活は巨大システムによって支えられているといいましたが、そこには「制度」も含まれます。たとえば、学校です。日本では、ほぼ2人に1人が十数年もの長きにわたって学校で学びます。このうち9年間は義務教育で、国家が教育を受けることを権利として認め、同時に義務づけています。これは、読み書き計算や公の場所での振る舞い方を含めて、社会で一人前の人間として生きていくために最低限必要なものを身につけることを国家が要求し、同時に保障しているのです。無料の義務教育があるおかげで、収入が少ない家庭の子も教育を受けることができます。また奨学金制度もあって、親の収入が十分でなくても進学して、生れ落ちた環境とは別の世界で仕事をすることができるのです。

ほかにも失業保険や生活保護、年金制度、国民健康保険制度、介護保険制度などがあります。これらの制度のおかげで、仕事ができなくなっても生活できます。病気になっても、病院で治療を受けることができるのです。ですから、制度はわたしたちの生活になくしてはならないものです。他人に頼らなくても生活できるとつい思ってしまうのは、このような制度があるからです。

なぜ、制度が用意されているのでしょうか。少なくとも先進国といわれる国々では、制度によって暮らしをある程度まで保障しようとし、わたし達も当然だと思っています。なぜでしょうか。根底には、西欧近代が生み出した理念があります。「自由」で「平等」な「個人」という理念、いわゆる「人権」です。アメリカ「独立宣言」には、「すべての人間は神によって平等に造られ、一定の譲り渡すことのできない権利を与えられている。その権利のなかには生命、自由、幸福の追求が含まれている」という一文があります。1789年のフランスの人権宣言でも、第1条で「人間は自由で権利において平等なものとして生まれ、かつ生きつづける」とされ、第2条では、この権利を保全するのが国家の役割だとしています。

つまり、人間が「自由」で「平等」な存在であること、命や財産を奪われないこと、幸福になろうとすることなどを権利として認め、それを保障し実現するのが、国家の存在意義だ、ということです。

「自由」で「平等」な「個人」を、社会を構成する基本単位とし、「国家」を大共同体として、生活を保障する、ということです。どうやって保障するかというと、「法」と諸制度、デモクラシーによってです。

このような考え方を明確に打ち出したのが、フランス革命です。革命では、「個人」と「国家」の関係のみを想定して、法の支配と合理的制度の構築によって幸福を実現できると考えました。個人と国家との間にはいかなる集団の存在も認めませんでした。これは当時の現実を無視した考え方ですが、あえてそうしたのです。

少し補足します。国民国家では、「国民」は、「自由」と「平等」のような理念か、あるいは言語や伝統的文化など、同じものを共有する同質的な存在だとされています。国家は、国境で領土を画定し、国籍で成員を決定して、この枠の中で人々の安全と生活を守り、幸福の実現を図ります。様々な束縛から解放されて「自由」になった同質的な「個人」と、領土内のことは自ら決定する「国家」が制度

構築の大前提になっているのです。もちろん、これはあくまで理念・理想で、歴史的な実態は違います。それでも、近現代社会の基本原則となっています。

ところが、今日、国民国家は揺らいでいます。経済・政治・文化・社会・メディアのグローバル化によって、世界は依存の度合いを深め、均質化しつつあります。先進諸国はグローバル化の恩恵を享受していますが、様々な問題に直面してもいます。人・モノ・情報をはじめとして多種多様なものが国境を越えて出入りするようになったために、国家が機能できなくなっているのです。

たとえば、グローバルな市場経済化は世界規模で競争を激化させ、経済的合理性・効率性の徹底的な追求と標準化を進めています。低価格競争を強いられるだけでなく、どこでも同じ基準を採用せざるをえなくなりました。そのために、どの国でも、風土や歴史的諸条件に応じて独自の制度によって保障してきた労働と生活のための諸条件を維持することが難しくなりました。

国家は事態にうまく対処できていませんが、激しい議論の対象になった TPP の例からも明らかのように、1 つの国家だけで決定できる時代ではありません。グローバル化は、国民国家の役割を変えつつあります。また、人の移動が常態化していますので、同質的な国民と領域性をもった国家を大前提に考える発想そのものの見直しが必要となっています。

グローバル化と生活との関係をもう少し考えてみますと、経済的利益を効率的にあげること一人件費をいかに低く抑えるかということでもある一を重視するあまり、本来、最も重要なはずのわたしたちの暮らしが軽んじられるようになりました。

当たり前のことですけれども、誰もが健康で幸せに生きていきたいと願っています。それには、生活の安定と安心が必要です。その基本的な条件は、就職して一定の収入を確保することです。真面目に仕事をしていれば、生活できるということです。結婚して子どもをもうけ、次の世代を育ててパトタッチしていくことです。人が生きていくためには、そして社会が存続していくためには、このサイクルを維持することが絶対条件です。

ところが、非正規雇用が増加し、雇用形態の約4割を占めるまでになりました。「ブラック企業」といって、利益をあげるために社員の生活を無視する会社も出てきました。公的年金も揺らいでいます。定年退職後、生活がどうなるかわかりません<sup>5</sup>。要するに、暮らしが不安定になって、社会が存続していくためのサイクルさえ成り立たない状況になりつつあります。

最近、「社会的排除」とか「社会的包摂」<sup>6</sup>という言葉をよく目にするようになりました。阿部彩さんによれば、「社会的排除」は、仕事を失って収入が得られなくなったり、生活が成り立たないほど低収入になることで、「労働市場から追い出され、社会の仕組みから脱落し、人間関係から遠ざかり、自尊心が失われ、徐々に社会から切り離されていくこと」をいいます。収入を失うと、普通の生活が維持できなくなり、人間関係を含めて一切を失って、生きていけなくなる、ということです。「排除」という言葉が用いられているのは、社会の仕組みそのものがそのような状態に人を追い込んでいくからです。

このような状況を前にして提示されたのが、「社会的包摂」という考え方です。わたしたちは、国家だけでなく、もっと小さな社会のなかで生きています。会社や学校、地域、町内会、趣味のサークル、

<sup>5</sup> NHK スペシャル取材班, 2013, 『老人漂流社会』主婦と生活社, NHK スペシャル取材班, 2015, 『老後破産:長寿という悪夢』新潮社。

<sup>6</sup> 社会的排除と包摂に関する記述(2つのパラグラフ)では阿部彩さんの見解を使わせていただいた。阿部彩, 2011, 『弱者の居場所がない社会—貧困・格差と社会的包摂』講談社。このほかに岩田正美, 2008, 『社会的排除—参加の欠如・不確かな帰属』有斐閣を参照。

家族など、いくつもの小さな社会のなかで存在を認められて、生きていけるのです。つまり、「これらの『小さな社会』は、人が他者とつながり、お互いの存在価値を認め、そこにいるのが当然であると認められた場所」なのです。このような「居場所」をもっていることが「包摂される」ということです。人が人として生きていくためには「包摂されること」が重要だと、わざわざ主張されるようになったのです。

さらに近代の価値観そのものに関わる問題もあります。「個人の自由」は人権概念の中核として徹底的に追求され、個人の意思を何よりも尊重することが当然視されています。このような「個人化」が進んだことによって、新たな状況が生まれています<sup>7</sup>。先進諸国では、物質的な生活水準が高まり、制度的な生活保障が発展したことで、人々は集団的制約から解放されました。しかし、今や国家の諸制度は機能し難くなり、集団的なものにも守られなくなって、社会的なリスクに直接さらされるようになりました。社会が流動化するなかで、この傾向は、社会的に発生する失業などの問題を集団や社会の問題としてではなく、個人の問題として受けとめるよう促しています。「自分のせいだ、自分で何とかしなければならぬ」という感覚です<sup>8</sup>。これを象徴しているのが、よくいわれるようになった「自己責任」という言葉です

このほか、現状の厳しさを感じさせる言葉に「無縁社会」があります。縁をまったくもたない社会、人とのつながりをもたない社会という意味ですが、誰とも親しい関係をもたないままに暮らし、誰にも知られることなく死んでいく人が増えているといえます。亡くなってもすぐにはわからないばかりか、遺体や遺品の引き取り手がなくて、その処理を専門に行う会社もあるそうです。わたしが「無縁社会」という言葉を知ったのは、NHK スペシャル「無縁社会—“無縁死” 3万2千人の衝撃」をみたときですが、大変なショックを受けました<sup>9</sup>。

私事ですが、わたしの両親が亡くなったとき、集落の人たちが仕事を休んで、お通夜やお葬式、埋葬、食事の用意など一切をしてくれました。いたるところで細やかな配慮が感じられて、「この人たちが記憶してくれている限り、両親は生きている」と思いました。それに比べて、「無縁死」はあまりに寂しい死です。どうしてこんなことになったのでしょうか。

わたしたちは、集団的な枠組みや規範から自由になったかもしれませんが、しかし、「自己責任」や「無縁社会」という言葉が象徴しているように、暮らしを支えてきた様々な関係を失って「孤立」を深めているのかもしれません。

以上からわかってきたことは、「自由」で「平等」な「個人」と「国民国家」という普遍的とされてきた理念、近現代社会の基本原理は、確かに価値あるものですが、それだけでは、人の暮らしは成り立たないということです。わたしたちは「生の充実」や「幸福」を願っていますが、それも難しい。今、求められているのは、「個人」と「国家」の中間にあって、もっと身近なところでわたしたちを支えてくれるものではないでしょうか。わたしたちは「支え、支えられる関係」を必要とし、そのための具体的な「場」なくしては生きられない、と思われるからです。

「地域」はそうした場の1つとして注目されているのではないのでしょうか。そうだとすれば、「地

<sup>7</sup> ジャン＝ポール・ヴィレーム、2009、「超近代(ultramodernité)の文脈における宗教」、ジャン・ボベロ、門脇健編『揺れ動く死と生』、晃洋書房、169-197。

<sup>8</sup> 宇野重規、2009、「社会科学において希望を語るとは 社会と個人の新たな結節点」、東大社研・玄田有史・宇野重規編『希望学1 希望を語る 社会科学の新たな地平へ』、東京大学出版会、273-276。

<sup>9</sup> NHK スペシャル「無縁社会～“無縁死” 3万2千人の衝撃～」、2010年1月31日(日)午後9時00分～9時58分放送、総合テレビ放送。NHK「無縁社会プロジェクト」取材班、2010、『無縁社会—“無縁死” 3万2千人の衝撃』、文芸春秋。他に石川結貴、2011、『ルボ 子どもの無縁社会』中央公論社参照。

域」とは何なのか、「地域」にどう向き合うのか。これが次の問題になります。

### Ⅲ. 地域学は何を目指しているのか

それでは、ここから地域学の説明に入ります。地域学といっても様々なタイプがあって、これが地域学だとはいえません<sup>10</sup>。独自に構想するしかないのですが、地域学部では、悪戦苦闘しながら、地域学の基盤となるもの、「地域学の精神」とでもいうべきものを探求してきました。「地域を考えるとき、どこに立って、どこにまなざしを向けるのか」ということです。

地域学部では、「地域学」を regional sciences と複数形で表記していますが、regional science と単数形で表現される場合があります。それはアメリカのウォルター・アイサードが唱えたもので、「地域科学」と訳されています。アイサードによれば、地域科学は、とくに経済現象に注目して、地域を客観的に分析し、地域が抱える諸問題を科学的に解決しようとするものです<sup>11</sup>。したがって、数量的、統計的分析が重要です。アイサードは「国際地域学会」を立ち上げましたが、その支部が「日本地域学会」です。わたしたちの地域学も、地域を見るとき視点の一つ、「客観的・構造的視点」として「地域科学」を取り込んでいます。

地域学部になる前に、5年間ほど「教育地域科学部」だった時期があります。地域への取り組みはこのときに始まりました。当時は「地域科学」的なものを目指したのですが、なかなか手応えといえるものをつかむことができませんでした<sup>12</sup>。一生懸命やりましたが、なんとなくしっくりこないものがありました。当時はよくわからなかったのですが、地域科学では、「一人ひとり」が抱えている思いや切実さ、願望などが入る余地がなく、どこか冷たく感じたからだと思えます。それで、地域学部になって「地域学入門」と「地域学総説」を始めるとき、今日の講義タイトルと同じように「なぜ、今、地域なのか、地域学なのか」から考えることにしました。まったく素朴な疑問ですが、自分のなかにある問いに素直に従って、そこから再スタートしようと思ったのです。

試行錯誤を繰り返す中で、気づいたことがあります。1つは講義を聴くときの学生の表情です。授業では学外で素晴らしい実践活動をされている方々にお話をさせていただきました。驚いたことに、わたしたち教員が話しているときとでは、学生たちの様子が全く違うのです。実践者のときには、食い入るようにして聴いていたのです。

実践者の語りは、なぜ学生たちをひきつけ、心を揺さぶるのか、考えてみました。実践者は生活から離れたところで問いを立て、考え、実践してこられたわけではなく、自分の欲求や願望、切実な問い、やむにやまれぬ気持などに衝き動かされているようでした。だからこそ、聴く者に「確かなもの」を感じさせるのではないのか、ということに気がついたのです。それで、研究者・教員である前に、まずは、「生活者」として、自分の足元から、生活の現場から考えることにしよう、実践者に学ぼう、と思いました。

もうひとつ気づいたことがあります。「地域」が人の口に上るようになった背景には、一過性のものではない、何か根源的な欲求があるのではないか、ということです。それは実践者の語りの中で強

<sup>10</sup> 廣瀬隆人, 2008, 「ローカルな知としての地域学」, 日本社会教育学会編『日本の社会教育』52。ほかに, 京都造形芸術大学編, 編集責任中路正恒, 2010, 『地域学への招待』(改訂版), 角川学芸出版を参照。

<sup>11</sup> W. アイサード, 1980, 『地域科学入門(1)』大明堂を参照。原書は Walter Isard, *Introduction to Regional Science*, New Jersey, 1975。

<sup>12</sup> 地域政策課程と地域科学課程の必修科目に「地域研究論序説」があった。授業では、すでに退職された光多長温先生や昨年急逝された仲野誠先生とご一緒させていただいた。お二人とともに仕事できたことは、忘れられない貴重な経験である。



く感じられましたし、学術的な研究においても確認することができました。社会の深部で「地殻変動」とでもいうべきものが起きているのではないかと、あらゆるものが見直され始めて、長い間、人々の目に見えていなかったもの、あるいは、見ようとしてこなかったものが見えてきたのではないかと、いうことです。

それが何かといえば、わたしたちは様々な「つながり」や「関係」に支えられて生きているはずですが、そのことを実感できなくなっているのではないかと、「根っこ」を見失ったことが「不確かさ」や「虚しさ」、「生きにくさ」を感じる一因になっているのではないかと、だからこそ、「つながり」や「関係」を何らかの形で「とりもどそう」としているのではないかと、いうことです。「つながり」や「関係」とは、人と人との結びつきだけではなく、自然や風土と人間の生活との関係、過去や過去に生きた人々との関係、さらには、未来の人たちとの関係です。そうしたものを含めて、わたしたちをとりまくすべての「つながり」や「関係」です。「地域」が注目されているのも、こうした「〈つながり〉をとりもどす」という動きの一部ではないかと、思ったのです。つまり、「地域」とは、様々な「つながり」や「関係」があたかも地層のように積み重なったものではないかと、思ったのです。

それでは、このような「〈つながり〉をとりもどす」<sup>13</sup>という要請に応えるには、地域学はどうすればいいのでしょうか。わたしたちは、「一人ひとり」を重視しました。そして、「一人ひとりが人として生きられること」「誰もが生きられる状態」の実現を地域学の目標としました。そのために、地域を見る視点として5つを確認しました。先ほどの「客観的・構造的視点」のほかに、生活の現場から生活者として考える「生活の視点」、「わたし」の「いま、ここ」からスタートしてわたしたちを取り巻く関係性を捉えようとする「〈わたし〉の〈いま、ここ〉からの視点」、人の生を過去から未来に続く営みの中で捉えようとする「歴史的視点」、そして、人を移動する存在と見て、そこから人の生の在り方と地域性との関係を考える「移動の視点」<sup>14</sup>です。「客観的・構造的視点」以外の4つの視点は、「地域のなかで、地域とともに考えよう」とするものですが、地域学は地域のなかに留まるものではありません。地域の生活に足場をおいて、そこからまなざしを、国境を越えた大きな世界にまで、向けていくのです。視点の問題は極めて重要ですので、『地域学入門』<sup>15</sup>を熟読してください。

<sup>13</sup> 『地域学入門』のサブタイトル「〈つながり〉をとりもどす」には、フランス史の研究成果も反映している。フランス史から筆者が学んだのは次のような理解である。人々は日々繰り返される具体的な生活を通して様々な約束事や知恵、生きていくときの根っこになるものを身につけた。判断の基準や振る舞い方をつくりあげていたのは、伝統的な生活の仕方と文化的な枠組みであり、いわば「聖なるもの」であった。しかし、この枠組みは不変ではない。たとえば、フランス革命期に「聖なるもの」が抑圧され失われようとしたとき、村人たちは革命の理念を伝統に基づいて解釈し、伝統的な行動様式に接合しつつ、カトリック教会と革命派から「聖なるもの」をとりもどそうとした。革命の理念を独自の仕方でも受容しながら、生活のなかに新たな局面を切り開いて、自己変革を遂げたのである。Suzanne Desan, *Reclaiming the Sacred: Lay Religion and Popular Politics in Revolutionary France*, New York, 1990.

<sup>14</sup> 赤坂憲雄さんは、「いま、故郷はどこにあるか—地域学への問い」(『地域学への招待』所収)のなかで、日本の近代史を農村から都市への人口移動と棄郷/帰郷の観点から捉えている。明治以来「故郷」から切り離されてきた人々の意識は今どこに向かおうとしているのか、何を求めているのか、という問題と「地域」への着目は深く関わっているようである。赤坂さんはまた『婆のいざない』で、「定住的思考」と「遊動的思考」という表現を用いて、次のように述べている。心の拠りどころとなり、アイデンティティにとってもっとも大切な岩盤のようなものを「故郷」とみなせば、今は「複数の、いくつもの故郷をいやおうなしに抱え込んで生きる、それが当たり前になって」いる。今日では、唯一の「定点」と「故郷」を前提にした定住的な共同性に閉じこもって、異質なものを排除するのではなく、いくつもの「定点」と「故郷」を創り出すような遊動的思考へと向かわざるを得ない。閉じられたアイデンティティではなく、「やわらかく開かれたアイデンティティ」に耐えることを学ばなければならない。『婆のいざない』, 258-260, 266。「地域」を考えると、留意すべき指摘ではないだろうか。

<sup>15</sup> 「歴史的視点」については、柳原邦光, 2012, 『『地域学総説』の挑戦6』『地域学論集』第8巻第3号参照。

まとめますと、『地域学入門』を執筆したとき、わたしたちにとって問題だったのは、「自分の立つべき位置はどこなのか、まなざしをどこに向けるべきか」ということでした。そして、気づいたのは、目を向けるべきはまずは自分の足元であり、そこからまなざしを空間的にも時間的にも広げていくことです。自分の足元、すなわち自分自身を、自分の育ってきたところを、生活しているところをよく見てみよう。そこを足場として、生活する当事者として考え、行動しよう、そしてまなざしを広げよう、ということです。

もちろん、地域から距離をおいて、生活の場を枠づけている大きな構造を捉えようとするまなざしも欠かせません。つまり、「2つのまなざし」が必要だということです。自分自身の生活から「つながり」や「関係」を捉えようとするまなざしと、これとは真反対に、生活の場や地域を俯瞰的に見つめ、「つながり」や「関係」を大きく構造的に捉えようとするまなざしです。このような複眼的なまなざしをもってはじめて、「つながり」や「関係」を取りもどすことができるのではないかと考えています<sup>16</sup>。

## おわりに

最後に2, 3お伝えしたいことがあります。「つながりをとりもどす」というと、「そんなこといっても、昔には戻れないでしょう」といわれることがあります。「つながりをとりもどす」とは、かつてあった「つながり」や「関係」を元通り復元することではありません。たとえば、自然との関係を「とりもどす」というとき、昔のように田んぼや畑に出て農作業をしようというわけではありません。何らかの形で、自然と関わり、自然を感じる状態を生活の中にもつということです。その形は時代や状況によって、あるいは人によって、当然異なります。

また、今日の話をお聴いて、「地域＝ローカル」という印象を強くもったかもしれません。わたしがみなさんに伝えたかったのはこういうことです。わたしたちは「生活の世界」をもっと見つめるべきではないか。そこに豊かな泉を見出すことができるのではないか。足元の「生活の世界」から捉え直すことで、見えなかったこと、見ようとしなかったことが見えてくるのではないか、ということです。さらにいえば、「生活の世界」から始めて、もっと大きな空間やナショナルなもの、グローバルなものを捉え直そうということです。小さな地域を重視し、そこから考えることは、ローカルな世界に閉じこもることではないのです<sup>17</sup>。

少し補足しますと、哲学者の内山節さんは、「大きな世界」から「小さな世界」へ視点の移行が進んでいるといいます。最初に大きな世界を構想し、それとの関係で小さな世界を見ようとする従来の視点から、自分たちが暮らし、責任もてる小さな世界を大事にして、小さな世界のネットワークとして大きな世界を見ようというのです<sup>18</sup>。

もう1つは、グローバル化のなかで、人もモノも情報も、自由に、国境さえも超えて移動するという

<sup>16</sup> 歴史研究では、川北稔さんの次の書物が参考になる。そこでは生活史研究と、世界を経済的に一体化した世界経済と捉える世界システム論とがうまく関係づけられている。川北稔、2010、『イギリス近代史講義』講談社。

<sup>17</sup> 赤坂憲雄さんの見解を紹介しておこう。「小さな地域こそが国家を超えて、より大きな世界へとつながってゆく契機となるかもしれない。あるいは、異質なるものがともに生きてゆくための道筋をデザインする、たいせつな拠りどころになるのかもしれない。だからこそ、みずからの拠って立つその場所を、ひとたびは肯定しなければならぬ。それがいざれば、内なる他者や、異なった民族や地域の文化や歴史、あるいは風土といったものを肯定し、ともに生きる可能性へと開かれてゆく手掛かりになるかもしれないと思うのです。」(赤坂『婆のいざない』: 235)。このほかに、フランス史の研究であるが、二宮宏之、1994、『歴史学再考 生活世界から権力秩序へ』、日本エディタースクール出版部も参考になる。

<sup>18</sup> 内山節、[2005] 2008、『「里」という思想』新潮社、100-102。

現象についてです。たとえば、鳥取でも海外から来られた人と接することは珍しいことではなくなりました。隣人として暮らし、一緒に仕事をしたりもします。また、インターネットで世界の情報を瞬時に得ることもできます。人であれ、モノや情報であれ、異質なものと文化に日常的に接することができるようになってきているのです。そこから「異なるもの」が自ずと結びつき、新たな何かが生み出される可能性があります。

この可能性をさらに大きくする意味でも、海外に出ていくことは重要です。1 例をあげますと、昨年、地域学部で「東アジアキャンパス in TOTTORI」を開催しました。これは中国厦門大学・韓国翰林大学校・台湾高雄師範大学と地域学部との学生交流プログラムで、「東アジアで語学力と現地感覚をもって活躍できる人材を育成するプロジェクト」の一環です。海外から参加したのは40名あまりで、地域文化学科の学生20名がサポートしました。

午前中は日本語の授業を受け、午後は日本や鳥取の歴史や文化を学びました。また、「地域は少子高齢化と過疎化にどう向き合っているのか」をテーマに地域調査をして、最後に成果発表会をしました。交流プログラムに「地域学」を導入したのです。発表会を通して、それぞれの国の制度や状況の違いがよくわかって、とても勉強になりました<sup>19</sup>。9日間のハードなプログラムでしたが、大変好評で、今年は参加者がさらに増えそうです。

同じような企画は厦門大学と翰林大学校でも行い、地域文化学科の学生が参加しました。お世話したりされたりして、学生たちはみんな仲良くなりました。留学する学生も出ています。学生たちは言葉や現地に少しずつ慣れて、モチベーションをさらに高めているようです。

このような活動をベースにして、昨年、鳥取大学・厦門大学・翰林大学校の3大学合同で「東アジアで生きる越境人の養成」を目的に「キャンパスアジア」に申請しました。「キャンパスアジア」とは、日本・中国・韓国の3つの大学が自国の文部科学省に申請して1億円から2億円の資金で、合同で人材を養成する5年間のプログラムです<sup>20</sup>。わたしたちの場合は、それぞれの言語、地域性や文化を知り尊重しながら、東アジア世界で国境を越えて自由に活動する「越境人」を育成するというアイデアです。7か月の間に3つの言語を学ぶ予定でした。申請書の「事業の目的・概要等」の項目で申請目的を簡潔に述べましたので、引用しておきます。興味のある方は後で読んでみてください。

深刻な環境汚染と経済成長の限界、人口の大都市集中と少子高齢化・過疎化による地域の衰退など、人々の生活基盤そのものが脅かされている今日では、地域に根差し、地域に拠点を置きながら、広い世界を視野に入れて自在に発想し行動する人材、国内外の多様な人々と交わり、関係を創出して、生活基盤を再構築できる人材が求められている。すなわち、以下のような能力をもった人材である。自らの地域について確かな認識をもつとともに、異なる文化や習慣をもつ人々と交わることをためらわず、関係を構築しようとする意欲と実践力、国家を超えた広域的空間に存在する諸文化の複雑な関係を深層から捉えるための知識と「まなざし」、そのために必要な最低限の語学力と現地感覚・現場感覚である。

具体的には、育成する人材の活躍する場として、生活拠点である地域と、現実的に活動の場となる、東南アジアを含めた広い意味の東アジア世界とを設定する。学習内容については、自らの

<sup>19</sup> 柳静我・柳原邦光、2017、「『東アジアプログラム』と東アジア『越境人』の育成」、『地域学論集』第13巻第3号参照。

<sup>20</sup> 正式には、文部科学省「平成28年度大学教育再生戦略推進費『大学の世界展開力強化事業』計画調査～アジア諸国等との大学間交流の枠組み強化～」（キャンパスアジア、事業期間5年間）の「タイプA-②」である。

生活の場を含む地域を理解することから始まって、政治的・経済的・文化的構造と特性など、東アジア世界を成り立たせ存続させているものは何か、グローバリゼーションにともなう人・モノ・情報など移動の常態化によって東アジア世界及び域内の諸関係はどのように変化しつつあるのか、いかなる課題を抱えて、どこに向かおうとしているのか、などを学ぶ。これが「東アジア地域学」である。

残念ながら、採択されませんでした。が、挫けることなく、4年後にもう一度申請しようと意気込んでいます。というのは、このような「越境する」経験が新たな何かを生み出すのではないかと考えるからです。これも「小さな世界」を大事にしながらまなざしを「大きな世界」に広げる試みの一つです。

それではこれで講義を終わります。

「2017年6月2日受付，2017年6月22日受理」